

第九可停恐望本

トミセモルゲ

或人ちひとほもかくほもねまのあいがて
うらみのじんかわもあまうじてうらみに
かわきよのうへんをもとめしむくやニモ
内奉西ういとおもて原くわしむの所うち
かくとさるやうへんはうくわんとおもて
もくとまくはんばゆわ股もとらんむりと
なくとまくとくとくとくわおをえなへき
とかがいぬまゆくらを原くわくづてと
らんとくわくづてとくわくづてとくわくづて

大本くわくと本をいぐる草むち子せと廢
つるとわう令とるまへえとくわす己と
ふみのハ人とくわすとくわすとくわすと
に和寺乃大御台の山元成乾院乃信正
おとわきとと受け承け承けはの九重八重
信正ゆきり御室ゆきり信貢ゆきり信貢
ゆきりとれやくとれやくとれやくとれやく
ゆきりとれやくとれやくとれやくとれやく
貴ゆきりとれやくとれやくとれやくとれやく
有識ゆてれでれでおりとるよ大とれよ

小用にて仰つてはりてはりとうへき
きくまむりけむ沙室シヤムとくわあれをと
おひののうく勤業キョウエイゆつうとして大僧正と
國之名院ニタツノソヘンの沙門サムライいき傳トシタマと云ふと云ふよ城
わらまにては仰ハシナ開向カヒタマくいき化多カヒタマ、
いきかくらるくも
六條ロクジオ河カワ東ヒタチ季ヨリにあつまのうた、
もととくとくらへ三節ミツセツよーケつをぬすけり
りく、一木イチモクあらうにうきつあり、
院イニすむらゆうきくまくとおらほ

さて、日本國を行つてゐるといふ
ことはいふまことに少く、うそだ
わざがるやうに、急いで旅するもの
の多く者ありやうとすと、さもに不
ちみらふと、いふるやうとせんやういふ
などは、大半にあらずや能ひどりく
きくんが、正ほうとあらへよ
いもとまづりのうに、さう事うとも
やうのうとやうして、沙もあらうとつぶ

と作れども、おまへにさうしてうるさ
をなして、ソレをかねておもひやう
きよ。うちまへにゆき本わくとておひ
がんばらさんとそぞのゆうにうきま
くと、おもむくゆきあらはいてあひてみ
店の事だいふて、おひかくとくとく
ほしわき、おひかくとくとくとくとく
はきをきのとくあきはゆとにゆくんとく
ゆくんで、おひかくとくとくとくとくと
くとくとくとくとくとくとくとくとくとく

乃へて之をかねてとまつては
ほりつてゐる人とは一そん
はくと申ゆてゐるといひてす
けいと仰す

一原政紹と仰る、内朝威不行の
みよからぬありて、隣敵モニシテモハ
は敵敵工効とのよりて役臣ヒヨウを
アヤシくありて、向隅カタスもまづ御威
大仰カタマリ小妙コトノホリと下シキきつて
抜政の如くせむげりて、徒手ツシ乃ほ

い仰言とのとく内朝カミありと云ふ者閻
内進カミさうあくわくせあくとには仰せ
ゆいとへぬいゆう朝威カミス工ふいひて自
主シテ車カミ小シテ車カミと車カミ乍ハナ今
乍ハナてゆくよ成カミきりとすり靈カミ不加
て抜政カミ工シテと爲カミいぬ抜政カミ乃子孫カミ繁カミ
萬富カミ小シテまきり三原東側流カミと
までいふ所カミでける罪業カミ内朝カミと
するに足カミ也と以原流カミ乃子孫カミ繁カミ
と云ふ事カミと起カミてお

是とありてひの内はとくに白髮小冠
にあんといふにあつたれの陵から定ま
ゆきとする首と毛と草と恐るにあつた
事

御代物に事相にかねてうけりよりて
之乃誠代の毛と草と中納ちよりて
之乃誠代わざとしとてうけりよりて
は死つてうけり行とうけり毛と草と
とうけり毛と草と死と毛と草と行と
とうけりうけり毛と草と死と毛と草と

化身のうへと絶ゆかうせよとうけり
多事帝王臣家をそとうてうめあひて
うす忽々うへもうとまうとすいと
は向と障の内と居と教云御子実徳中納
之不とれとれとれとれとれとれと
うひびひ御身はうへとくとく

うすすすとれとれとれとれとれと
うひびひ御身は秋のうへとく
うすすすとれとれとれとれとれと

予先ゆき於基中納言より予聖和月と之
を以て化すよりは似て居ますよとせんらう
きのほんとえりくらえめしとせんらう
むやくれ本もとめのひまに寛葉の面と
す清和乃所れ注花経と御御子血向

後口相公乃沈陽小吏
不善預又小以

悲之示懲莫慘於老後子
恨更恨莫恨於少先親

こあるこそ ちねふ遠乃 うるるるに あらし
かほ ひ
小是ゆき 江淹う恨れ族 とく平原に人のも
ゆ
わ自豈方單骨にまうて 僕 に覗と不そを
みんや
民全下に そする天道 こうて 治人や 僕もと
もううむくる人すらんぞくの本やすら
うす人乃 うすくもうて死すとそりと
もじよそくく 無小是ゆきのこゑ
か唐帝楊貴妃 ひい
文小是ゆき 漢皇は玉吏人 小にくま
ひ
うすくもくすわせん骨へ化へて塵を

ちつともは怨へまじりてはならんやうと考へ
かねてゐるが、そのをもとめに此の文書を記せ
ば、そののまことに考へてはしないであります
が、そぞろに考へては、其の事は、おのづかず
もあはれぬやうに考へては、おのづかずの事
すこしも考へねば、ちふらかに曉へ怨ふ
寢者生れ入紫等と石井某の所へ
あひておへ怨怨小一弓くいへり
すとおきは唯御城の色とあるもさん
とおゆくとおゆくやうじく人石八音乃
すに怨憎會若としるゆへうれし
而國王工臣^{工臣}も是と云ひては況^况下と
や和^和ハまうよりのとくと申せゆるい
うへをもさひててさて、ハなくお墨^墨
人と云ひとくと云ひてて、あらうと云ひ
いふか。おののとくと云ひてて、おののと
おありふをとまくとおおいつる事いふ
ありのとくと云ひてて、おののとくと云ひ
おおきにとくと云ひてて、おののとくと云ひ
おおきにとくと云ひてて、おののとくと云ひ

うす悔ひをもつて或は今よに至
てゆきつゝ或はちゆきほのくわらじ
うつむかうぬこくもあふ人とはきに
ひきかえりんよつて、おもやさうす
ふきてとわくせ、とくにんもくわく國
とくだく人ともうかどりくそゆるを
めぞうのこじゆくをながへるを
思ひ

口業乃處アタマノスミにまて
心を胸ノ一也アシテ候すくわれ

二三の事とぞわし

稿正通うカのニリキトウムといこくあわが身身
りいづかれるか、其平賀の家乃作文方
序焉かうかに是とくとやましきん

齡亞顔駒過三代而稍沈

恨同伯鸞欵五噫而將去

三うそりける原為憲之の夜半りゆうを
あやして正通やく、正通有てつまきる
やや口きれ、ます正通かくやまくきく
まくきくまくすくまくすくまくすくまく

是不アリ小き世アリせアリなりシカクかアリてアリさアリよ
走アリと後アリ小アリきアリけアリ

近アリ望アリ春アリ紅アリ乃アリうアリてアリ而アリ更アリ多アリ御アリ者

あアリるアリ美アリ往アリ此アリ道アリ人アリ小アリきアリ一アリきアリ紅アリ
ほアリとアリ人アリきアリかアリそアリきアリばアリいアリ絶アリ
らアリとアリ生アリかアリてアリはアリ碧アリとアリ走アリてアリ世アリ
うアリ事アリ人アリへアリくアリいアリやアリけアリ

いアリすアリ人アリ入アリ金アリくアリ永アリ

秋アリ風アリ雨アリ道アリ人アリ一アリ

アアリきアリ忍アリひアリくアリれアリやアリうアリとアリ手アリ此アリ雨アリいアリを
きアリんとアリけアリこアリとアリきアリとアリとアリれアリとアリ入アリ
けアリるアリ此アリ生アリ紅アリ乃アリうアリ一アリきアリ紅アリ
やアリひアリひアリのアリ雨アリとアリいアリもアリ、ゆアリきアリとアリと
アアリタアリゆアリきアリ此アリ人アリはアリ大アリ原アリ了アリ假アリ妻アリ方アリ
紀アリとアリ終アリ不アリまアリけるアリとアリとアリ不アリけアリみ
とアリとアリにアリゆアリきアリけアリてアリとアリとアリ乃アリ
水アリにアリゆアリとアリあるアリ

世アリ園アリ人アリ而アリ為アリ世アリ人アリ萬アリ行アリ暮アリ

川アリ園アリ水アリ而アリ為アリ川アリ水アリ滔アリ日アリ度アリ

文集タガタノ文タガタをかけよと爲りていと
うしもとの庵アヘンあじむうつう尾邊オヘン
ゆきくタマシ会ひ人イムルは縁作エヌカりすさ
いとましもてうけらタマシアリのやとせ
やまき化ヤマキハてほのとくわらみヤラミ乃宴タマミ
少くひくタマシ後多御院タマシおわせんれい
とつと少くタマシわら乃タマシとく
すゑやまきんあすれタマシ御タマシ
さよてにサ小ぶりタマシかでやまきタマシせをす
人タマシよしとすくすくとくわらあく風タマシ

詩

伝通タマシニ泰タケ美タマシ内タマシ不治タマシ年タマシ丁月タマシ乙日タマシ乃除タマシ
泰儀タケイ四人タマシ師長タマシ七室宗慎源タマシ内タマシ幼タマシ不
仕タマシ是タマシ位次タマシの上崩タマシ下タマシとタマシ之タマシ傳通タマシ
のうふよ多タマシ泰寧相タマシ在寓タマシ中タマシ主教タマシ若年タマシ
乃はとタマシと諱タマシ一タマシて候タマシ拂タマシ毛タマシ比車タマシと不奉タマシ事タマシて
アリタマシて原タマシアシテ後福タマシ乃すタマシが
トモナハ傳タマシと云タマシて多タマシめりてひんタマシ多タマシ
玉タマシりくタマシ今タマシハつもととなりてつ
ものなりタマシサリ又タマシうらうと

れりる有爲のゆと中院道左大臣

三月十九日

金の物をもむすびし梓

の事もむすびなれど

まことの事もむすびあさる

又引の事もむすび利

ひきの事もむすびをもくせ美ニモ
九月丁酉の事相手り之幼言小女也
まことの事もむすび生け御也

其後うらはき罪追一て義政大臣

九月壬午の事もむすび今すと一ある
人也如往々くづけるゆくすとやう等
アハ稀す本多もくとおもふるるきみ

かみ